

令和5年度 地域包括ケア市民講演会「認知症と共に生きる」

講演会概要

- 1 日時 令和6年2月12日（月）13時30分～15時30分
- 2 開場 あつぎのえいがかん kiki
- 3 参加人数 90人
- 4 映画「オレンジランプ」上映
- 5 講演

- (1) 講師 加藤 忠相 氏
(株式会社あおいけあ 代表取締役)

- (2) 講演内容（概要）

日本の人口統計を見ると明治維新以降に急激に増加していますが、今後の100年で4,000万人ほどになり、高齢化率は40%となると見込まれています。さらに高齢者の半分以上が認知症になるとされています。

高齢者が増えると言われていますが高齢者数は横ばいで増えていません。日本の高齢化率は若い人がいなくなっているために上昇しています。

そのため、施設を山のように作ったとしても意味がなく、地域社会の中でどれだけ当たり前前に生活できる社会を作れるが目標となります。

日本の平均寿命、男性80歳、女性87歳となっています。これは生まれてから死ぬまでのことなので、赤ちゃんでなくなった場合も含まれています。50歳を超えると、男性は85歳、女性は91歳で亡くなることが多く、また85歳の41%は現状のところ認知症であります。90歳になると61%が認知症になります。95歳以上になると82%が認知症、16%がその前段階の人である。90歳を超えたら認知症でないほうが珍しくなります。

認知症ケアとは認知症になっても地域社会の中で当たり前前に生活できる環境を作ることが本当の意味での認知症ケアであります。

2040年には100歳以上の高齢者が30万人（現在9万人）たった17年で3倍以上になっています。さらに約40%が単身世帯の高齢者になってしまいます。

高齢者像も昔と変わってきています。高齢者も一緒に頑張れる社会を作らなければいけません。

今後は三人称で考えてしまっているため、自分事で考えなければいけません。

認知症は病気だが、認知症という病名はありません。認知症は症状であり。

ほかの病気で例えるとくしゃみ、鼻水、せき、のどの痛み、腹痛と同じです。腹痛には原因となる病気（胃潰瘍等）があるのと同じようにアルツハイマー型認知症、血管性認知症、レビー小体型認知症などの三大認知症があるが全部で 70 種類の病気があり、それらが原因で脳細胞が死んでしまうことによって出てくる症状のことを認知症といいます。

認知症は困ってなければただのおじいちゃん、おばあちゃんです。地域の方が性格や職歴、環境等をわかっていると意外と地域の中で生活ができます。

認知症になると記憶を司る部分が障害されてしまい、新しい情報が掴めなかったり、側頭葉に情報を入れることが難しくなります。認知症になると他の部位が代替えます。一番発達している扁桃核（感情を司る部位）が代替えしようとしてます。そうすると認知症になると怒りやすくなったり、泣きやすくなったりするのは感情が優先してしまいます。

環境が壊れると認知症は悪くなり進行しやすくなります。

覚えている記憶は認知症になっても消えません。認知症は怖いと感じるかもしれないが、今後、マイノリティ（少数派）ではなく、マジョリティ（多数派）になります。多数派が当たり前で生活できない社会の方がおかしいです。将来、自分もほとんどの方も認知症になります。その時に施設に行けばいいというのが今の社会であります。

主人公のモデルである丹野智文氏は、自分の家で最期まで多くの人に囲まれながら暮らし、影響を与え合うことが社会の中で当たり前になってほしいということ思いを「オレンジ・ランプ」に込めたのだと思います。